



批評的な読みへの実践

教育学部 大島 丈志



2004年に文教大学教育学部に赴任。専門は日本近代文学、宮沢賢治作品の研究を中心とする。その他、大江健三郎や深沢七郎、司馬遼太郎なども研究の対象としている。近年は現代のアドレッセンス中葉（思春期）向けの文学作品であるライトノベルの研究も行っている。卒業論文ゼミナール、日本文学演習、日本文学概論、基礎演習Ⅰ・Ⅱ、国語（心理教育課程）等を担当している。（おおしま・たけし）

読むことは、一見簡単に出来そうである。しかし、ただ楽しみながら読むだけではなく（もちろんそのような読みも大切だが）、批評しながら読み、自らの意見を作るといふ、批評的な読みの能力を獲得するためには一定の訓練が必要となってくる。いかに学生の興味を失わずに、批評的に読むということを知りやすく教えるかを考えながら授業している。

今回は、1年生春学期の基礎演習Ⅰと3年生秋学期の日本文学講読Ⅱの取組みについて紹介したいと思います。

1. 基礎演習Ⅰ

基礎演習Ⅰは教育学部で開講されて3年目になるいわゆる「導入教育」に相当する演習科目である。学生は50名程度、大学生活に必須の知識や技能を新入生に身につけてもらうのがこの授業のねらいである。

具体的には「大学で学ぶとは」という教員の講義に始まり、「書くこと」「読むこと」「話し合うこと」を行い、最終的には形式・内容ともに大学生として必要な基準を満たしたレポートを作成することになる。

この授業でとくに力を入れたのは、いかに批評的な読みの力づけさせるか、それを無理なくつける授業をつくるかということである。最初は身近で具体的な課題、たとえば新聞記事や架空の刑事事件の疑うべき点を探し出すことからはじめ、最後には学術論文を批評的に読むという演習まで持っていった。新聞記

事等の段階では多くの学生が積極的に批評し、自らの意見を作り出すことが出来ていた。ただ、やはり学術論文となるとハードルが高く、読むことから逃げてしまう学生も見られた。批評的な読みの力を養うためにはもう少し長い時間が必要であることを痛感させられた。

この基礎演習Ⅰの授業では大学生としての基礎を教えるわけだが、実は専門分野の違いという問題を孕んでいる。基礎といっても専門分野において教えるべき基礎には差がある。それは注のつけ方、原稿用紙の使い方といった細部に表れる。これはある程度の画一化を学生に求める「導入教育」の抱える一つの問題点ではないかと思う。

ただ、基礎演習Ⅰは数名の教員によって同時開講されている科目であり、教員同士が2ヶ月に1回程度の頻度で集り、授業での問題点や資料の提示、最終目標の確認が行われた。

この話し合いが細々とした問題を乗り越えるためには大変役立った。教員間での意見交換の効果の大きさを実感した体験であった。

以上が基礎演習Ⅰにおける批評的な読みへの実践である。

2. 日本文学講読Ⅱ

次に日本文学講読Ⅱという授業について紹介したい。この授業は作品を読む学習の最終段階に当たるものである。専門性の高い授業ではあるものの、30名程度の学生の中にはある程度難易度の高い物語をあまり読んでことがないという学生も数名おり、読むことが出来る学生とそうではない学生との差は大きい。

学生からの質問で、小・中・高の国語の授業では物語を教えるが、文学作品をどう読めばよいのかまだ十分に分からない、というものがある。そのような学生に基本的な文学の理論を学んでもらい、より深く、多面的に批評的に読むための道具を手にしてもらうのがこの授業のねらいである。

授業の形式は理論を学んでもらう講義、実際に理論を実践してもらうための演習を隔週で行う参加型授業である。この隔週形式にすると、教師の講義、学生の演習ともに十分な時間の余裕を持って行うことが出来る。

読むための理論を学ぶ講義では60分程度の講義を行い、その後、必ず実際に講義の内容を使用した問題を解いてもらい、単なる座学ではなく学んだことを実践してもらう時間を設けている。

また、文学理論に拒絶反応を示す学生も少なくなき、いかに分かりやすく伝えることが出来るか、画像やグラフ等を用いて紹介することを心がけている。

演習においては前回の講義の内容（作家論等）をふまえた上で、テキスト（本年は『注文の多い料理店』、その他配布資料）から発表してもらう。

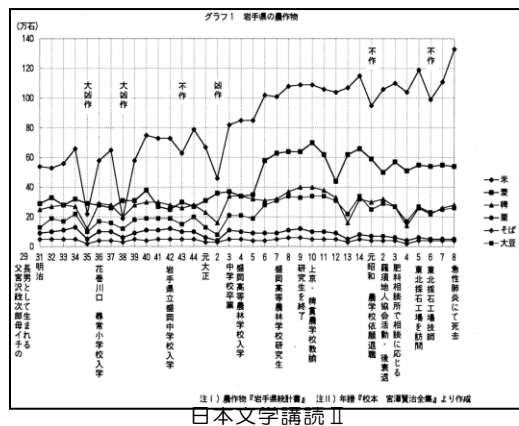
意欲的に取り組ませるため1グループ4～5人とし、講義の後に、発表者を研究室にあつめて発表に関する事前指導を行う。そこで

はテーマのしぼり方、批評的な読みについての助言、レジュメの作り方、発表時間に関する知識を与える。

演習においては参加者全員に参加意識を持たせ、批評的に読む力をつけてもらうための工夫として学生それぞれが記入する用紙を用意し、聞き手に質問を書かせる。これを行うことで聞き手の学生にもテキストを批評的に読み、自らの意見を作り出す作業が行われる。参加学生が記した用紙は、教師が目を通し、まとめた上で発表者に渡す。発表者はこの用紙を見て、他人の意見を読み、発表に関する批評を自らの読みにフィードバックすることにより、さらなる読みの可能性を開くことが出来る。教師からの批評だけではなく、学生同士の批評には学生も非常な注意を払う。

演習発表の後、質疑応答を行い、質疑応答において回答できなかった質問や質疑応答中には出なかったが聞き手が記入した重要な質問については次回の講義の最初の5～10分間にレジュメを用いてフォローさせる。

これらの試みによって、国語の授業を行う上で教員に必要な批評的に文学作品を読む力の育成を図っている。



グラフを使用して作品の背景を考える。

以上二つの実践例を述べてきた。まだまだ、課題は山積している。授業研究会等で他の先生方の授業をみせていただき、教材研究を通じて、常に自分の授業力アップを目指していきたいと考えている。